——追 悼——

鈴木博子さんの急逝を悼む

海 部 宣 男*

鈴木博子さんが亡くなった．

あまりにも突然の，あまりにも性急な死である．

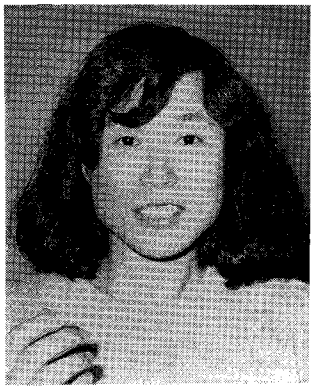
これまでの星間分子探査の努力が一度に花開いて，C_6H, CCS, CCCS, c-C_3H と次々に新しい星間分子の発見を重ね，宇宙での化学反応研究に新展開を期していた矢先の，全く思いがけない自動車事故だった．

事故は11月22日の朝9時すぎにおきたと推定されている．清里の森別荘地内の道路わきの電柱に正面衝突した黄色いトゥディの中で，右手にハンドル，左手に鍵束をしっかりにぎり，眠るように助手席側にたおれている姿で発見された．頸部骨折による即死であった．鈴木さんが昨冬新築したばかりの自宅から，ものの数百メートルしか離れていない下り道である．ちょっとしたわき見運転が，鈴木さんを死につながる最悪のコースに導きいれてしまったのだろうか．

鈴木さんは前日まで，名大理学部の齋藤研究室での共同実験に参加していた．新しい星間分子候補についての実験である．20日に，私は鈴木さんから報告の電話をもらった．この新しい分子の宇宙での検出を試みるため，早急に 45 m 鏡の観測時間が必要とのことだった．ただちに相談して12月の観測所時間の一部をあてることに決め，野辺山に帰着後くわしい相談をすることにした．21日夜に帰宅した鈴木さんは，翌朝家を出たところで，この新分子の観測や，構想をあたためていた論文，改良作業中の観測・解析プログラム，気に入っていた新しい家など，たくさんのものを残したまま，帰らぬ人となってしまった．悔んでも悔みきれない．私たちにとっての衝撃の深さ，大きさ，とても語りつくすことはできない．

鈴木博子さんは，傑出した能力と活力をもつ研究者であると同時に，人をひきつけずにはおかない不思議な魅力にあふれた女性であった．海外の星間分子研究者から寄せられた数多くの弔電が異口同音に述べているように，鈴木さんの死は世界の星間分子研究にとってとりかえしのつかない損失である．

鈴木博子（本名 濱田博子）さんは，昭和22年7月15日，京都府西舞鶴で，濱田家の長女として生まれた．府立西舞鶴高校から京都大学理学部を経て，大学院では天体核（林研究室）へ進んだ．この間結婚して鈴木姓となり，のち離婚．しかしその後も，研究者としての活動上の必要から，鈴木名を用いていた．林研究室では Herbst and Klemperer (1973) などの星間分子のイオン-分子反応の論文に刺激されて，未開拓の分野であった宇宙における分子生成の研究に手をそめた．複雑多岐にわたる反応をしらみつぶしに調べ，周到な反応ネットワークを用いた大規模な計算機シミュレーションによって暗黒星雲中での分子の生成・消滅を追求した論文で，世界的に「鈴木」の名が知られるようになった．さらに暗黒星雲の diffuse 領域中の C^+ イオンの働きによって，炭素原子の鎖が1つづつのびてゆくという説を提唱．暗黒星雲の化学組成の一大特徴をなす直線炭素鎖分子の生成についてのこの鈴木説は，その後野辺山での一連の星間分子の発見によって大いに強められ，新しい発展が期待されることになったのである．



昭和55年に理学博士となり，58年1月には研究員として野辺山宇宙電波観測所に移った（60年に助手となる）．これ以後野辺山での5年間にわたる大活躍が始まる．

まず，45 m 鏡という強力な装置を得て，それまでの理論を実地の観測とつき合わせていくこと．鈴木さんは野辺山分子スペクトル探査の責任者として，縦横の活躍をした．暗黒星雲 TMC-1 のスペクトル探査を進める一方，分子構造の理論計算や分子分光実験の研究者と積極的にコンタクトし，独自の反応論的見通しにもとづいて新分子発見の方向をさぐった．鈴木さん，大石君，私など観測グループと，理論の村上さん，平野さん，小谷野さんたち，実験の斎藤さん，川口さん，山本さん，松村さんなど，多くの研究者との交流が拡がり，実を結んでいったのである．

野辺山での鈴木さんはまた，その抜群の計算機の能力で，なくてはならない存在だった．45 m 鏡ソフトウエアの責任者であり，ぼう大なスペクトル線解析ソフト「LINEPROC」をほとんど独力で作りあげ，さらにその改良，新開発をつみ重ねつつあった．「私達が1000行かけて書くプログラムを，鈴木さんはまたたく間に，100行で書いてしまう」と，野辺山で働く計算機の専門家たちがなかばあきれながら話す．

鈴木博子さんは，その独特のソプラノ声と京都弁で，彼女を知るすべての友人の耳と心にやきついている．全身で生き，よく喜び，よく悲しむ人であった．そして大のあわて者でもあった．大好きだったのは，乗馬．それにフルート．どちらも素人ばなれしていた．子供の頃からの読書好き．10月の中国旅行では，中国料理を120パーセント楽しんだ．

野辺山観測所の住宅難にいや気がさして，忙しい中を頑張ってすてきな家をたてた．さびしい別荘地の中だが，かえって落着くと喜び，お母さんと一緒に暮したいと希望を語っていた．鈴木さんが工夫をこらしたその家も，もう主はいない．

最近，鈴木さんは，「今が私の研究者としての一生で，一番しあわせなのかもしれないと思うの」と，よく仲間にもらしていた．鈴木さんが生きていれば，まだいくつもあったであろう研究者としてのピーク．その一つをきわめて，あわただしく逝ってしまった鈴木博子さんを，私たちは決して忘れない．

* 東京天文台野辺山宇宙電波観測所 Norio Kaifu